

療養環境が患者に与える影響

- 記憶回想法時に与える影響を考える -

札幌太田病院 3階病棟

塩田 美神子¹⁾

1) 看護師

1. はじめに

私が看護学生の時実習に行った精神科病院は、窓が小さく病室にはほとんど日射が入らない暗い雰囲気のある建物であった。当時の私は、精神疾患患者は暗く狭いところに収容するというイメージを持っていたため、その窓の小ささは私の漠然としたイメージを裏付けるものでしかなかった。そのため札幌太田病院の3階病棟を見学させてもらったとき、デイルームの窓の大きさとそこから見える山々のすばらしい景色に驚き、それとともに違和感を覚えたものだ。大きな窓からは日差しが暖かさを感じることができ、今まで私が思い描いていた精神科の暗いイメージとはまるで違うものだったからである。

人間は自然からの一定の刺激に対して一定の反応を示すと考えられる。例えば木々の緑色は人々に安心感を与え、空の青色は人々に開放感をもたらすなど、ほかにも例はたくさんある。

環境には自然環境、社会環境、経済環境、教育環境等色々な種類がある。今回は、目に映る山々や、空、日光、空間などが入院者に何らかの影響を及ぼしていると考え、この自然環境を有効に活用し、高齢者の記憶回想法を行ったので報告する。

2. 研究内容

1) 事例紹介

A氏、80代男性、アルツハイマー型痴呆、要介護4

精神状態不安定であり、時折暴力的になることがあるが、安定しているときには「ありがとう」などと笑顔で答えることがある。

- ・治療方針：薬物療法、作業療法
- ・看護目標：回想療法を通し、認知能力の回復、増進ができる。

2) 実施内容

- ・実施期間・時間：平日の1週間・14時～17時の間
- ・方法：サービスステーション(以下SSと略す)内とデイルーム(以下DRと略す)内で回想療法を実施し、その違いを比べる。

記憶回想法とは、対象者が過去の出来事を思い出し、それを聞き手が共感的に聴き、相互作用を通じて、自己洞察する方法である。複数の対象者に対し、一人の聞き手が実施する場合もあるが、今回は対象者(患者)一人に対し聞き手(看護師)一人で実施する方法で行った。

(1) SS内で回想療法実施

SS内の環境としては、外の景色が見えなく、職員の出入りが激しく騒々しいため、高齢で難聴もあるA氏へは、つい大きい声で問いかけてしまう。そのためか不明だが、興奮することも時折あり、回想療法を実施しようとしても、質問に答えられず、全く関係のないことを答え

ることが多い。

(2)DR 内で回想療法実施

DR 内の環境は、日光が差し込む窓からは三角山が見える。SS 内に比べると静かで、時間の経過もゆったりと感じる。広いスペースなためパーソナルスペースも保持することができる。

「お世話になった方は誰ですか？」と質問しても SS 内で実施したときと同様に答えられなかったり、関係のない内容を話すことはあったが、大きな窓を利用し「天気がいいですね」と質問すると「本当だね」と笑顔で回答することができる。出身場所を聞いて答えられることもあるが、答えられないときに三角山を指差し「Aさんの生まれたところにも山があったの？」と質問すると「あったよ」と答えてくれた。

3) 結果

SS 内での回想療法は、質問に対し適切な応答が少ない。また、DR とは違い、外の景色等を見ることができないため、共通の話題を作りづらい。

DR 内での回想療法は、質問した内容を答えることができなくても、外の景色をヒントに質問するとうなずいたり、「そうだね」と答えることができるなど、SS に比べると反応が良好であり、笑顔も多かった。

3. 考察

SS 内は、一見職員が大勢いるため孤独ではない印象があるが、それは職員から見た視点であると考えられる。なぜなら、患者にとっては単ににぎやかで、パーソナルスペースが狭くさみしい場所と感じているのではないかと考える。

太田名誉院長は「自分は誰か、名前は、ここはどこか、今日は 月 日か、 時か・・・というように見当識を失うと不安、緊張、抑うつとなりやすい。自分が見知らぬ外国に言葉も通じず放置された状態を想像してみると理解

できます。」¹⁾と述べている。職員同士の声が飛び交っている SS では、かえって患者を孤独にさせているのではないかと考えられる。現に A 氏が SS 内で過ごして居る時、何度も車椅子から立とうしているのは、SS という孤独な場所から逃げ出したいという想いからかもしれない。DR でも立ち上がろうとすることはあるが、SS に比べると少ないという事実もある。

一方、DR はパーソナルスペースが保持でき、ゆっくりとした雰囲気があり、日光浴ができ、外を眺めると多くの緑と三角山を見る事ができる。このような雰囲気は、リラックス効果を与えるのではないかと考えられる。

回想療法は内観療法同様、自分がいかに多くの人に助けられ生きてきたかを実感する機会になる。DR で回想療法をすることで、お世話になった人を思い出し、孤独感から解放され、日光を心地よいものと認識することが出来るのではないかと考えられる。

ナイチンゲールは『患者たちがほとんどみんな、ちょうど植物が光に向かって伸びていくように、顔を光に向けて寝ている姿はなんとも不思議なものです。中には「こちら向きで寝ると身体が痛い」とぼやく患者もいます。「それなのになぜ、わざわざそちらを向くのですか？」とたずねても患者にはわかりません。でも私たちにはわかります。それは、そちらに窓があるからです』²⁾と述べている。このことから、患者にとって外の景色、特に日光はなくてはならない存在であり、このような療養環境は、精神の安定等に良い影響を与えるものであるといえる。

4. おわりに

患者の安全上 SS 内での経過観察も必要な場合もあるが、患者の能力向上のためにも、食事の際等に DR 内で記憶回想療法をすることで、A 氏の看護目標である「回想療法を通し、認知能力の回復、増進できる」を現実的なものにする事が出来ると考えられる。

ある患者に DR の環境についてきいたことがある。その患者は「デイルームは景色もいいし、太陽の日差しをたくさん浴びることができる。だから味噌汁一杯がご馳走に感じるよ」と話してくれた。

療養環境が患者へ与える影響を有効に活用し、今後も患者の持てる力を引き出し、能力の保持・増進に努めていきたいと考える。

文 献

- 1) 太田耕平：幼児期から高齢者までの心の発達十段階心理療法，第 10 版．医療法人耕仁会札幌太田病院，p305，2004
- 2) フローレンス・ナイチンゲール：普及版看護覚え書，第二版．うぶすな書院，東京，p99，1999